

各団体活動状況

節目の演奏会を終えて マンドリンクラブエレガンス

代表 三戸 良子

習志野市の市花である紫陽花が、色鮮やかに咲いていた。去る六月十二日(日)マンドリンクラブエレガンスは「第四十回定期演奏会」を習志野文化ホールで開催しました。

一九五一年にマンドリンオーケストラを設立したいとの元代表松本都史子の声掛けで誕生した当団は、二十年前に、指揮者田久保裕一先生をお迎えし、今年で創立四十六周年となりました。

創立五年目に、第一回演奏会を開催して以来、毎年習志野文化ホールで演奏会を続けてきましたが、ここ二年あまりのコロナ禍で、何度も練習の中断を余儀なくされ、演奏会自体も中止せざるをえない状況となり、この度三年ぶりに演奏会を開催でき喜びもひとしおです。

練習日は毎週木曜日ですが、何十年も日常生活の一部になっていた毎週の合奏練習が中断され、改めてその大切

さ、皆が集い音楽を作り上げられる喜びを団員皆がひしひしと感じました。

そしてまた、習志野文化ホールとともに歩んできた私達にとり現ホールでの最後の定期演奏会になることが重なり、演奏会を迎える準備と練習に一層励んでまいりました。

当日は、コロナ感染対策を万全にして、久しぶりの演奏会を楽しみに待っていて下さったお客様をお迎えし、会場は一杯になりました。

二部構成で企画した今回は、一部はマンドリンオリジナル曲を中心に、軽快なオーブニング曲に始まり、平和を願う曲、語りが入る劇的序奏「細川ガラシャ」、田久保先生のソプラノリコーダーと指揮でリードする「シルクロードより」など親しみやすい曲を、二部では、昨年亡くなった創設者松本都史子、コンサートミストレスで活躍した元団員を偲び選んだ田久保先生編曲「さき玉女の為のパヴァー



ヌ」やワルツ「皇帝円舞曲」、哀愁に満ちたマンドリンの音色で奏でる「レ・ミゼラブル」メドレーと変化にとんだ選曲との好評をいただきました。アンコールの「八木節」ではお客様の手拍子で盛り上がりそのまま大きく温かな拍手が会場を包みました。

長年親しんだ習志野文化ホールへの感謝の想いを込めて精一杯の演奏ができ盛会にて終了できましたことは、これまで多くの方々にご支援いただきました賜物と心よりお礼申し上げます。

今後は、演奏会会場探しや団員の高齢化など難題もありますが、音楽を愛する気持ちが変わらず、五十周年を目指して活動していきたいと思っております。

習志野文化ホール 習志野文化ホール楽友合唱団

団長 佐久間 泰宏

音楽連盟所属の「習志野文化ホール楽友合唱団」は、平成二年に文化ホールの呼びかけに集まった市民らによって結成されその後、年に一程度、文化ホール自主事業に出演又は独自の演奏会を開催する合唱団です。

一昨年よりコロナの関係で、開催が予定されていた演奏会は直前で二度中止となりましたが本年八月「パイプオルガンと合唱のひととき」として文化ホールの自主事業に加えていただき念願のフォーレ「レクイエム」を演奏することができました。

指揮者に鈴木哲雄先生・練習ピアニストに越田美和先生にご指導いただきました。

合唱団は例年百五十名近い参加者が三ヶ月の練習で原則オーケストラ伴奏による本番を迎えますが、コロナ等により今回は少ない回数・期間での練習と九十名弱のメンバーで習志野文化ホールが誇るパイプオルガンとの演奏を行いました。



撮影 スタジオ・スペース・フォト

このホールは、来年三月末で閉館となってしまいとても残念ですが、このホールでの最後の自主事業として来年三月二十六日の日曜日に開催される「県民芸術劇場公演」の第二部のオペラガラコンサートに出演させていただきますことになりました。

コンサートの第一部では、千葉交響楽団と文化ホールのパイプオルガンの演奏も予定されておりますのでぜひ演奏会に足を運んでください。

四十九回の書展を顧みて

書道連盟

聚華書道会 吉原 聚堂

国から無形文化財の指定を受けている書道は、長い歴史の中で多くの人に親しまれ幼児から高齢の人まで幅広い年代層によって支えられて来ました。

何より日頃毎日の様に書かれている文字が少しでも上手く書ける様に思う事は至極当然の事で、伝達の方法だけでは無いのです。実用的美を突き詰めて行くと芸術としての書道に行き着きます。

中国から入った漢字は我国で独自の進化を遂げ「かな文字」が誕生し、かなと漢字によって表現方法は格段に進歩しました。

硬い楷書、隸書、柔らかな行草書、漢字かな交りの調和体、かなや細字など、各自の好みで色々な表現が可能になります。

又、次々と書体を替えてよりの自分の好みに近い書体を探して行く事も出来ますし、一つの書体を書き続け更に深化させる事も出来ます。

当会では、その書道を広く知って貰う為に様々な創意と工夫をして来ました。

今年四十九回を迎えた書道展は、華道、ちぎり絵、陶芸、

絵画、写真などと共催し、双方の持つ文化の良さを広く知って貰いましたし、和紙ちぎり絵との共催では、要請により教育センターにそれぞれの作品の寄贈も出来ました。

又、旅や祭り、童謡や少年院の詩集、エチオピア文字などテーマを決めて書き、祭りのテーマの時は地域の人々の手により大きな秋田の竿灯や雪のかまくら等も作られ地域ぐるみの書展になりました。

その中で最大の催しは五年毎の双方の節目の年に開催してきた「書と花の交流展」で、今年で六回延べ三十年に亘る書道と華道の一大イベントです。

習志野華道協会の歴代会長、役員による強い推進力に依って市内に於ける最大の華道展となりました。バックを飾る白と黒の書と華やかな季節の花々が良く調和して見に来てくれた人々の感動を呼びました。互いに道のつくこの文化は日本人の向上心の源です。

生ある限りこの最適な書道を学び教えて行きたいものです。



習志野郵便会の活動

習志野郵便会

檜垣 廣政

「方寸の芸術品」と呼ばれる郵便切手。いづれどこからどこへ郵送されたかが分かる記録の追跡が可能な消印の押されたはがき封書等の郵便物を収集家はエンタティアと呼び、特に貴重品として好んで収集をしている。

自分だけの個人収集では、独断と偏見が先行して自由で良い面もあるが、切手収集を楽しむには限界があります。

そこで個人収集から個人交流に場を求めて、郵便会等の会へ参加して、情報の周知共有、切手の交換が出来る場が必要となつてきます。収集活動の「輪」が拡がり、交流の「和」が深まります。

「楽しく切手を集め、楽しく交流を深める」この目的を達成する為、習志野郵便会では、毎月の定例会実施、会報「習志野郵便」の発行を基本に活動している。

あなたと私、二人が並ぶ「2並びの日」、横浜の友人から元気かい！習志野郵便会頑張っているね！というはがきが届きました。消印は横浜中



央局機械印(四〇円はがき)、差額の不足分二三円は窓口にある料金計器証紙で貼付。西暦 2022.2.22 の日付が鮮明に表示されていた。

さて、4月に入つて令和

4年4月が合わさって幸わせた日。今度は習志野郵便四月号を友人に発送。四四円証紙貼りに四四切手、四〇円切手を貼り八四円定形封書料金とし、四街道局から発送。こんなこだわり便で和を深め、楽しんでる。